

幼児と保育者のかかわりに関する「自明性」について考察する

----- イギリスの公立幼稚園をフィールドとして その2 -----

豊田一秀

(ROEHAMPTON INSTITUTE LONDON)

はじめに

本研究は、昨年、本学会で発表した「複数の教師によるクラス運営の功罪について」——イギリスの公立幼稚園をフィールドとして——の継続研究である。本研究はイギリスと日本の幼児教育の比較を目的とした研究の一部であり、本論の主要部分はイギリスの公立幼稚園（STATE NURSERY SCHOOL）をフィールドとした質的研究によっているが、筆者の約20年にわたる日本の幼稚園における担任の経験も比較の対象の資料としている。イギリスにおける事例資料は1997年9月より開始した週に一回程度の参加観察を主たる源泉としている。

本発表のキーワードとなる「自明性」について少し説明を加えたい。自明性とは、それが当事者にとって余りにも当然の事柄や考え方であるため、物事を考える際の前提となってしまう、その事柄や考え方の持つ意味や価値に改めて気付く事が難しくなる事に対する命名である。簡単に言えば「当たり前感」と言っても良いであろう。従って、自明性はそれ自体、価値を伴うものではない。また、自明性を同じくする者の間では、その自明性が意識化される事が少ない。

一般的に、自明性を他者と共有する度合いは、対象者との物理的、精神的、時代的、文化的距離が近い程高まる。例えば、同じ家族は他の家族より自明性を共有しやすいし、同じ学校に通う者は同じ校風を継承する。さらに、同時代を生きた人は世代的な空気として自明性を共有しやすい。また、個人の内においては、幼少の時から習慣として来たものが「それ以外のものを疑ってみたこともない」という意味で高い自明性を持つ。

いずれにしても自らの、そして他者の自明性に気付く事は、自らの考えや感じ方を相対化する事に役立ち、他者の行動や考え方に対する理解を深める。本研究では、イギリスの保育における幼児と保育者のかかわりに関する自明性について考察し、合わせて、この面に関して日本の保育の持つ自明性を逆照射する事を試みてみたい。

1、保育場面における自明性について

保育の場面においても、様々なレベルの自明性が存在する。卑近な例としては、当人は当たり前として行ってきた、男児はブルー、女児はピンクの名札の色使いを、同僚から何故、そのようにするのかと問われる事もあるであろうし、他の幼稚園を見学すれば、その園の一種の「園風」を感じる事もあるであろう。また、他の地方を訪れる事で、自らの土地の保育風土と言ったものの地域性を逆に感じる事もある。

前回、イギリスにおける複数の教師によるクラス運営の功罪について考察したが、その後、研究を継続する過程で以下の点に付いて洞察を新たにした。1、ある現象についてその「功罪」を問おうとする場合、その前提となる基準、即ち何をして「巧」とし、また何を「罪」とするかという判断において、すでに個人的、地域的、時代的、文化的バイアスがかかっている。2、複数担任を自明とする点は確かにイギリスの保育の一つの特徴であるが、その自明性はより深奥に存在するイギリスの保育風土の可視的側面の一つに過ぎない。これらの洞察は、いずれも筆者の自明性に対する「気付き」の深まりの結果である。

前回の発表に於いて筆者は、イギリス、日本、両国の保育を包括的に特徴づける言葉として、前者を「羊飼型保育」、後者を「愛着型保育」と命名した。しかし、当然の事ながら、イギリスの保育者が自らの保育を「羊飼型保育」と称して特徴づけている訳ではない。彼らは皆、自分達はごく普通の保育をしていると考えているのである。自明性について当事者に尋ねる事は出来ない。この事は日本の「愛着型保育」に関しても同様である。

2、イギリスの保育：「羊飼型保育」の特徴

前回、筆者がイギリスの保育を「羊飼型保育」と呼んだのは、以下の5点において保育者と幼児の関係が、羊飼いと羊の関係に似ているからである。a. 保育者が権威を持っている事。b. 活動において幼児が受け身になっている事。c. 保育者が幼児をグループとして管理しようとしている事。d. 保育者と幼児の情緒的な親和関係が薄い事。e. 複数の保育者がクラスの保育に関与する事。（紙面の制約から、これらの特徴の根拠とな

る事例を記述する事は省略する)以上の5点に通底するポイントは、保育者(大人)と幼児(子ども)の関係の在り方にあると言えよう。イギリスでは、幼稚園のみならず教育現場一般で「子どもは誰がボスなのかははっきりと知らなければならない」という言葉が良く聞かれる。イギリスの幼稚園は、基本的に、保育者が幼児達の「羊飼ひ」となって幼児をコントロールする事の中に保育者としての専門性を求める。保育者一人に対する幼児の数が少ないのも、コントロールが可能な幼児数という事を念頭に置いている面もあるからである。

保育者は計画された活動を幼児に与える事において、手順、目的等、吟味するが、それ以外の、自由に遊ぶ時間においては、安全の確保をその役割の第一としている。従って、遊具の選択等はするものの、遊びそのものを指導して幼児の生活を高めて行こうとする視点は少ない。この点も正に羊飼ひ的な存在である。参加観察の中にも、a.保育の中で、幼児が特定の保育者を求めたり、その保育者がいないと安定出来ないという傾向が少ない事、b.保育者に対し、幼児が我を通そうとしたり、依頼、要求する場面が少ない事、が多く記録されている。

3、羊飼ひ型保育の持つ自明性

羊飼ひ型保育の持つ自明性の一つとして、保育者と幼児との親和関係が淡い事が挙げられる。即ち、保育者が幼児の内面に深く関与しない事、同時に、幼児も保育者を強く求める事が少ない事、そして、それが、お互いの日常生活になっているのが特徴である。これを比喩的に表現すれば、保育者と幼児の間の体温が低いと言えよう。

上記の特徴が幼児にもたらす一側面として、保育者自身の持つ人柄や個性が、幼児にあまり影響を与えないという傾向を指摘する事が出来る。幼児は設定された保育場面において保育者に教わり、指示を受け、また、自由な遊びの際にも指導や制限を受ける。しかし、それは場面における保育者の「職責」に基づく指導であるに過ぎず、幼児は保育者一般よりの指示の一つとして、これらを受け取る。

この事を保育者側から見るならば、保育者に求められる専門家としての職責が比較的はっきりしているので、仕事の内容と保育者自身の人間性や個性を離して考えやすいと言えよう。この事実が保育者の気持ちを自由にし、保育を語る事や、その場での人間関係自体を開かれたものにしている。

4、逆照射される「愛着型保育」の自明性

日本の保育一般に共通した特徴として、以下の諸点が考えられる。第1に、保育者と幼児の关系到いて、保育者は幼児との信頼関係を基本として保育を行う事。保育者は権威的關係によってよりも、幼児との親和関係を育てる中で幼児を指導しようとする。従って保育者には、幼児に対する共感性が求められる。第2に、保育の目的として、教授による知識の習得よりも、幼児の主体的生活体験を通じて、幼児の総合的成長発達を目指している事。第3に、保育の形態として、単数担任制であり、ひとクラスの人数が多い事。

幼児と保育者の間に親和感が育つ過程で、双方がお互いの気持ちに良く気付くようになる事は、愛着型保育の一つの特徴である。保育者は親和関係を基に、ねらいや指導が幼児の心に染み込むような形で定着する事を試みる。この結果、幼児は保育者の人格的な影響を受ける事となる。これを前述の比喩に従えば、保育者と幼児の間の体温が高いと表現する事も可能であろう。

この場合、幼児の保育者に対する親和度によって、時には保育者によるクラス統制が失われ、クラスが無秩序になったり、逆に幼児が保育者に同一化してしまうという事態も起こり得る。

愛着型保育において、保育者は幼児に「自分は良い子だ」という自己イメージを与える事によって、自己抑制力を付与しようとする場合が多い。穿った表現を許されるなら、幼児が「良い子」にさせられてしまうと言えるであろうか。この事を換言するなら、幼児が保育者の気持ちに同一化する過程で、深部にある自分の気持ちを見失う事、と表現する事も可能であろう。この点について、カウンセリングでは大人による「侵入」という概念で説明している。

保育者の問題としては、保育者の人格、性格そのものが職責と関連して語られると、保育者は保育上の悩みを自己の人格、性格に起因させて考える事になる。そして、保育について語る事が、その保育者の人格を語る事につながり易くなる。この事が結果として、保育上の議論を消極的なものにしやすい。近年、盛んに議論されている園内研修、保育カンファレンスも、保育の職責が人格や性格と重ねて議論され易く、保育者が孤立し易いという愛着型保育の一面を現わしている。

5、展望

保育における自明性について、異文化間の比較を試みた。今後、保育のさらに奥に存在する「子育て文化」の日英の自明性について比較する事も課題としたい。